
サイダー

明銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイダー

【Nコード】

N3064H

【作者名】

明銀

【あらすじ】

強気で健気な女の子とまだまだガキな男の子の、不器用な恋の話。

『サイダー』

作…明銀

掲載…『いつかみたあの空のような』

終業式が終わって、今日は部活もないからやっとな家帰るって友達としゃべってたら、突然カナがあらわれて部活ないんだったら、ヒマでしょ？ちよっとつきあってよといってぼくを拉致した。本当は、友達と帰るはずだった帰り道をカナに引っ張られて歩いていたら、夕方になったら近所の駄菓子屋にきてねって無理やり約束させられた。

カナとは小学校からずっと一緒だったんだけど、こーゆーときのアイツにさからえる奴なんていないんだ。たぶん。

それから、ひるめし喰ってシャワー浴びて、クーラーの部屋ん中で、いくのやだなーってゲームしてたら電話がかかってきた。

お母が出て、なにやらごによ喋ってると思ってたたら、突然お母は、カナちゃんが待ってるわよーって、ぼくを外にほっぽりだしやがった。

カナはお母まで味方につけているから、どういうわけかぼくは絶対言うことを聞かなきゃならない運命にあるみたいなんだ。

運命にはかなわないから、だれだれしながら自転車こいで、すぐ近くにある駄菓子屋さんの前にいったら、カナが一人で待っていた。カナはだいたいいつも子分の女子を連れてあるいてるから、今日もどっかに隠れてるんじゃないかって思ったんだけど本当に一人みただった。カナがなんか、にらんでるみたいに空を見てたから、ど

ーしたんだろーって思ってた話しかけたら、今気がついたみたいにくを見た。それから、何も言わないでさっさと店の中にはいった。だからぼくも、何見てたんだろって空を見たけど、いつもと同じ空だった。入道雲が、でかかった。

一口ちようだいよってカナがいうから、ラムネのビンを渡した。カナは本当においしそうな音をたてて、ぼくのラムネを飲み干した。ガリガリ君も食べたくせになって恨めしそうな顔でにらんでたら、一口残しといてあげたじゃないって、カナはビンの底にちよこつと残ったラムネをちゃぽちゃぽ振った。

もうすっかり気が抜けちゃって、ぬるくなった一口分のラムネを飲んでから、あ、これって間接キスって気がついて、ソーユコトに敏感なぼくは、すこしだけ赤くなっただ。

気が抜けたラムネはべたつと甘くて、口の中でちよこつとはじけた。カナがけらけら笑ってた。

そのあと、暑すぎて暑すぎてぼーとした頭で、カナと並んでベンチに座りながら、やることないなーってありんこ眺めてたら、カナが突然どっかいかない？というから、おれ、暑いから家帰りたいっていった。だけどカナはぼくのいうことなんかまるっきり無視してあれこれ考えはじめた。

なら、ゲーセン行きたいっていおうとしたら、ゲーセンのゲーテいった時点でもうシカト確定らしくて、完全無視。わざとらしく、えーとどこいこっかなー。なんていって、空をみあげてたりなんかするんだ。なんてわがままなおんなだ。

そのくせに、顔だけはかわいいから、バカな男どもはカナに逆らうことができない。よのなか、なんかまちがってる。

結局、ぼくの行きたいところなんて完全無視で行くことになった

のはデートスポットで有名な場所で、おまけに自殺の名所でも有名な場所だった。えーそってデートスポットじゃん、てデートって言うのがちょっと恥ずかしいなあて思いながらぼくがいったら、カナはもうこれ以上ないくらい楽しそうに笑った。それから、いつもみたいな命令口調でいーから行くよって言ってマウンテンバイクに乗り込んだ。

カナは、女子のくせにマウンテンに乗るんだ。その上、ぼくは兄ちゃんのお下がりのボロシティサイクルなのにカナがスピード出しまくるから、ぼくは付いていくのにも苦労する。もう、必死でカナを追いかけてくちやいけないから、汗だくになる。おんなのこにやさしく？ そんなこと、カナに対してはぜったいにあてはまらない。

ここらへんで有名な、デートスポットで、自殺の名所な場所は自転車で行くには少し遠い場所にあるから、途中で一度休憩したら、ヨシノが自転車で通りかかった。ヨシノは、部活の友達で、途中で帰り道が同じだから、よく一緒に帰る。

おーヨシノーって声かけたら、よーヤスダーってヨシノもこっちに来た。

ヨシノがカナのことを見てちよつと不思議な顔をしていたら、バスケ部の吉野翔君だね。コーダイと同じクラスの渡瀬加奈ですってカナがヨシノに話しかけた。ぼくはカナがマトモな口調でしゃべれる事にまずおどろいて、それから、どうもヨシノはカナのことを知らなかったらしい事におどろいた。

カナは女子バスケ部だから、ヨシノも何度かカナを見てるはずなのに、いままで知らなかったなんてある意味すごい。カナってそれくらい目立つやつだからさ。男子バスケット部でカナは、一部の人だけにだけ（カナの恐ろしさを知らない人たちにだけ）人気がある。

それから、ぼくがヨシノにどっかいくの？って聞いたたら、ヨシノはヨウヘイン家に行くって言った。ヨウヘイは、ヨシノの幼稚園の頃からの親友でばくも時々ヨシノに誘われて一緒に遊ぶんだけど、かなり頭がよくて、バスケもうまいやつだ。おれも行きたいって言おうと思っただけ、そのまえに、ヨシノはぼくら二人を見てから、ふたりは、デート中？なんて言い出した。

カナは、違うよーって笑った。なんだろう。ちよつと安心したよ、うな、なんかがつかりしたような複雑なキブンだ。それからすぐに、げ。なんでがつかりしてんだよおれ。って自分につっこんだ。

ちよつとヨシノとしゃべってから、また自転車にのって走り始めた。ヨシノも途中まで一緒だったから、カナもゆつくり走って、すこし楽になった。

それから、カナが、ヨシノの隣に並んで、ヨシノに向かってあれこれしゃべって、ヨシノが、ああとかうんとか答えてるの聞いてたんだけど、暑かったから、なんかめんどくさくなって、テキトーにふらふら一人で自転車こいだ。

分かれ道で、ヨシノと別々になってから、カナがぼくに、吉野君ってけっこう人気あるんだよって教えてくれたから、カナも人気あるよってぼくも教えた。そしたら、カナはふーんって興味なさそうにして、いきなりスピードをあげて走ってった。

カナに付き合うのは、これだから疲れる。

目的の場所につく頃には、カナカナゼミがなき始めていた。カナカナゼミって悲しそうな声で鳴くからカナカナゼミなんだよって誰かが言ってたのを思い出してカナに言ってみたら、あたしはアゲハチョウが好きだってカナは言った。

チョウチヨとセミは違うんじゃないかと思ったんだけど、どうせ

言っても無視されるから、黙っておいた。

デートスポットで有名なそこは、海に面した崖の上の広い原っぱで、何かの慰安碑が端っこの方に立っていた。夕陽がきれいに見える場所で、去年の夏休み、親戚と一緒に花火をやり到这里に来てたのをぼんやり思い出した。

ぼうぼうに生えた草をさわさわゆらして海から夕方の風が吹いてきていて、ぼくはもう汗だらだらだったから、涼しくて気持ちよかった。

草っぱらの中で、いろんな虫がなかった。

涼しいねってカナが言ったから、おれはまだ暑いって答えた。

太陽が海のほうにゆっくり落ちていって、だんだん空が真っ赤に染まっていって海に赤い光が反射して、一面夕焼け色になった。二人の影がずんずん伸びて、のびた手と手が重なり合っていた。自転車こいで疲れてたし、風が涼しかったから、しばらく、二人とも黙って立っていた。

ね、わたしたちって恋人同士みたいだね。

突然カナが言ったから、なんだか恥ずかしくなってなんだよ。さつきデートじゃないって言ってたくせになって、ぶっきらぼうに言ったのにふーん。コーダイさっきの気にしてたんだあ？ ってカナはにやにやしながら顔を覗き込んできた。

どうしてだかわからないけど、カナを喜ばせてしまったみたいでくやしかったから、気にしてねえしってもっとぶっきらぼうにいったらカナはけけら楽しそうに笑った。みすかされたようでむかつく。

それからカナがにやにやしながら、ちょっと目つぶっててって言

うから、昔ミミズを背中に入れられたことを思い出して、何されるんだって警戒しながら目つぶってたなら、後ろから肩に腕まわされた。ジャーマンスープレックスかよ!? ってちよっと身体硬くしてたら、そのまま、腕がやわらかく締まった。つまり、抱かれた?

やわらかくて、細くて、だけど、ぼくは動けなくて。顔が真っ赤になるの、自分でもわかって、耳が熱くて。

それから、カナが後ろから耳元にささやいた。

ふわふわって、耳に息がかかってきて、すごくすぐったかった。

ぼくはカナの声よりも、バクバクしてる心臓の音ばかりが聞こえていて、背中にヤワライモノが当たってるのも感じてて、もうなんていえないのか、とにかく大変なことになっていて、あたまぐちゃぐちゃになって、今日は空がやけに赤いなーなんて思ってたなら、ぐいって、後ろに引っ張られた。カナが腕まわしたまま後ろに倒れこんだんだ。

まるで、ベッドに倒れこむみたいな感じで、草むらに仰向けに転がった。カナの呼吸が耳元で聞こえて、たぶんぼくの心臓の音もカナに聞こえていて、カナがやっと腕ほどいて、二人で仰向けのまま空を見上げた。

見上げた空を半分埋め尽くすほどでかい入道雲が、夕陽の色に染まってる。

甘いような、苦いような、草のにおいがした。

それから先は、よく覚えてない。

なんか、ぐちゃぐちゃになりながら、カナと喋って、いつの間にか暗くなって、ちよっと寒くて、星が出て、月が昇って、風が吹いた。

中学一年の夏休み。

この夏の間だけ、カナとぼくはお付き合いした。なんと。花火大会、夏祭り、その他色々。週に二日はカナといた。ときどき、ヨシノとヨウヘイのところにも一緒に行った。

夏休みの間、ぼくからしてみれば、付き合わされた、だったけど、今思い返してみると、あれはデートだったんだと思う。

そういえば、キスも、した。

それから、夏休みがあけて、ぼくに好きな人が出来た。バスケット部のマネージャーの進藤さん。サラサラしたショートヘアで、どっちかと言えばおとなしめなカナとは正反対の性格。

だけど、二学期はじまってすぐに、ぼくとカナのカンケイは学校中に広まってしまっていて（先生まで知っていた！）進藤さんに告白、なんてできる状況じゃなかった。

そしたら、カナが言った。

コーダイって、エリちゃんの事、好きなんだって？

それから、とたんにカナはぼくに付きまとわなくなった。仲が悪くなったわけじゃないと思う。時々、帰り道で一緒になったとき、夏はおもしろかったね。みたいな話をしたから。けど、カナは一度もデートとは言わなかった。

学校でも、カナはぼくに話しかけなくなって、そのうちコーダイ・カナのカップル説は釣り合わないっていう話になってそのまま笑い話になって消えた。

失礼な、とは思ったけど、ちょっと安心した。だって、進藤さんは、カナのことが苦手だったらいいから。

2学期の文化祭の日、ぼくは進藤さんに告白した。だけど、進藤さんには好きな人がいた。ごめんなさい。進藤さんは、ぼくにそう言っていた。

2年になって、バスケットがうまくなって、背が伸びた。それから春休みの間に、吉野のお母さんが再婚して、吉野の名前が蓮田に変わった。けど、ぼくたちは蓮田って呼ぶのになんか抵抗があって、暗黙の了解って感じで、蓮田とは呼ばずに翔って呼んでいた。一学期の中間テストのあと、進藤さんによびだされた。付き合ってほしい。もちろん、即OKした。進藤さんとは、夏祭りのあたりまで付き合っていた。別れた理由は、自然消滅。なさない最後だと思う。

夏の後半は、翔たちと遊んだ。カナとは、一度も会わなかった。一度、街でカナを遠くから見かけたことがあったけど、なんだか気まずくて、話しかけられなかった。洋平は、2年になってからバスケット部に入っていた。3年が引退したあと、翔は部長になった。洋平達の学校と練習試合を組んだりして、なかなか充実した部活生活だったと思う。洋平は、やっぱり強かった。

中学最後の年。3年間は、あつというまに過ぎていった。部活の引退。三者面談。中学校最後の夏。最後の義務教育、最後の体育祭、最後の文化祭。最後の……という言葉だらけの夏だった。

中学三年の夏。記憶に残るものといえば、塾と洋平の家でした勉強会。それと、夏祭りの夜。ぼくと翔と洋平、洋平の彼女それからカナ。ほぼ一年ぶりにカナと一緒にすごした一日だった。

あの夏、カナは翔と付き合っていた。ぼくはそれを後輩から噂で聞いていた。複雑な気持ちで、ぼくは一日を過ごした。5人で街を歩きながら、ぼくは一人ぼっちの気分を味わっていた。浴衣で、花火を見上げるカナは、相変わらぬわがままだったけれど、翔とはうまくやっているようだった。ぼくはそっと離れて、遠くから眺め

ていた。カナが振り向いて目があつた、あの視線を覚えている。目を先にそらしたのは、カナだった。

そして、今日。卒業式を数週間後に控えたある日の昼休み。教室のストーブは二時間目までしか使用できないということで、冷え込んだ教室の中わずかな陽だまりを求め、窓際に固まって喋っていた。校庭の隅に、先日ふった雪の名残が見える。たぶんそれも今日の陽射しできえるのだろう。隣には、クラスの連中数人とカナと翔がいる。カナの事を意識してしまつて、ぼくは適当に相槌を打ちながら一人で景色を眺めていた。

「でさ、オレずっと気になってたんだけど、一年の夏るとき、カナさんとコウダイって本当に付き合ってたわけ？」

突然話を振られて、ギクっとした。斜めにして揺らしていたイスから転げ落ちるかと思った。ちょうど、ぼくもその時のことを思い返していたから。

結局、あの夏はなんだったのだろう。カナと目があつて、ぼくはあわてて下を向いた。カナがにやけて笑ったのが視界の隅に映る。

「付き合ってたよ。あたしのファーストキス、コウダイだし。」

突然、さらっと大胆不敵にカナが言い放った。ぼくに向けて。

「それなのにさ、コウダイはエリちゃんが好きだとか言い出すし。あたし泣くかと思ったよほんとに。」

けらけら笑いながら、カナがぼくの背中をたたく。

だけど、俺にどうしろって言うんだよ。もうあの頃にはもどれない。今更あの夏を繰り返すことなんて、もうできないんだ。それは、

カナだってわかっているだろ。

カナが俺に対する当て付けのように翔と付き合っていることにはなんとなく気づいていた。翔も多分気づいてる。翔は困ったように笑いながらカナを見ている。なあ、もうやめようぜ。あの頃にはもう戻れないんだ。カナが好きだったおれは、もうここにはいないんだよ。そう言いたかった。

突然の大告白に、沸き立つ教室の中で、一人上履きをにらみつける。だけど、知っている。本当は、カナを一番あきらめ切れていないのは、自分自身だって事を。進藤さんと付き合っていた日々。進藤さんの向こうにカナを探していた。夏祭りのあの午後。カナが来ると聞いて、あの夏が帰ってくることを期待していた。やっぱ、本当はカナの事好きなんだ。

太陽が沈むと、急に気温が下がった。

冷たい風が、立ちっぱなしの身体から熱を奪っていく。放課後校門で待っていると、帰りの会の時カナに伝えた。

とりあえず、あやまろう。あの夏を引きずったまま卒業はしたくない。キンと張り詰めた冬空の下、息が白く広がる。あたりは暗くなり始めていて、街灯の明かりが、やわらかく照らしてくれている。冬の大気は澄み渡り、濃紺の空に浮かぶ星が瞬いている。足音が近づいてくる。俺は、息を吸い込んだ。凍りついた空気が、肺に染み渡る。

思わず咳き込んで、それから、前を向いて。

話は、あっけないほど順調に進んだ。と、いうかカナがちゃかちやか話を進めた。鈍感だとか、ほんとにいつまでもガキなんだからとか、ずっと好きだったのとか散々ののしった挙句、カナが俺に告白した。

「もう卒業だし、いまさら付き合ってた言うつもりはないけど、わたしはコウダイの事ずっと好きだったんだ」

って、カナは翔の目の前でめちゃくちゃな事を言いやがった。

翔もとなりで聞いていた。それから、翔もぼそぼそ話して。カナに、後悔するくらいだったら気持ちをしっかり伝えといたほうがいいって言ったのは、翔だったらいい。

俺は、用意しておいた言葉、一つも言えないままだ立っていた。それから、三人で家に帰った。翔とカナと俺。三人ならんで道を歩いた。

カナは本気で翔と付き合っていたこと。翔も本気でカナと付き合っていたこと。だけど、カナと翔は、夏祭りのあの日、別れたこと。別れ話は翔からだったらしい。カナはいつだってコウダイの話ばかり、するんだぜと、翔が笑った。

それでもまだカナのことが好きなのか、とは聞けなかった。

「大切なものはさ、全部この腕からすり抜けて、なくした瞬間気づくんだよ。だけど、気づいたときには、もう手遅れ、なんだよね。」

カナがぽつりとつぶやいた。どこかで聞いた台詞だなんて思ったけど、そのとおりだと思った。俺たち、もう子供じゃないんだよね。胸のなかで、俺もつぶやいた。

「だけどさ、後悔はしてないよ。ていうか、したくない。だって、後悔しちゃったら翔のことも、コウダイのことも、否定することになる。それって最低だから」

「俺も。後悔なんてしないよ。カナにあえてよかった。色々助けてもらったしさ」

カナが言って、翔が答えた。

話を聞きながら、中学三年間の事、ずっと思い返してた。あの夏の日の気が抜けたラムネの味、夕陽の色、色々な思い出のつまった夏祭り。後悔だけじゃない、色々なことがあった。全部、なかったことになって、できないよ。

真っ暗な空の中で、寒そうに光っている星を見ながら、本気でそう思った。それを伝えたくって、言葉を搜した。

これからも友達だよな。卒業してからもよろしくな。俺も後悔なんてしてねーよ。

だけど、どれも違う気がして。俺っ…て言いかけたまま、何も続けられなかった。

それから、ちょっとだけ、思った。多分、この悔しさも、風の冷たさも、見上げた星も、いつか思い返した時、大切な思い出になっているんだろうなって。

空を見上げて、俺はいつの間にか立ち止まって、カナと翔が振り向いて、

「寒っみいーっ」

鼻をすすって、俺はまた、歩き始める。ちょっと小走りで、二人の方へ向かって。

おしまい

(後書き)

前半、ばかっぽい語り感を出すために、あえて一文を長くしています。コウダイらしさと受け取ってもらえたらうれしいです。

……それにしても、読み返すとはずかしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3064h/>

サイダー

2010年10月15日23時00分発行